

19 . その日、すなわち週の初めの日の夕方のことであった。

弟子たちがいた所では、ユダヤ人を恐れて戸がしめてあったが、イエスが来られ、彼らの中に立って言われた。

「平安があなたがたにあるように。」

20 . こう言ってイエスは、その手とわき腹を彼らに示された。

弟子たちは、主を見て喜んだ。

21 . イエスはもう一度、彼らに言われた。

「平安があなたがたにあるように。

父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします。」

22 . そして、こう言われると、彼らに息を吹きかけて言われた。

「聖霊を受けなさい。

23 . あなたがたがだれかの罪を赦すなら、その人の罪は赦され、

あなたがたがだれかの罪をそのまま残すなら、それはそのまま残ります。」

24 . 十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたときに、彼らといっしょにいなかった。

25 . それで、ほかの弟子たちが彼に

「私たちは主を見た。」と言った。

しかし、トマスは彼らに

「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、

また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません。」と言った。

26 . 八日後に、弟子たちはまた室内におり、トマスも彼らといっしょにいた。

戸が閉じられていたが、

イエスが来て、彼らの中に立って

「平安があなたがたにあるように。」と言われた。

27 . それからトマスに言われた。

「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。

手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。

信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」

28 . トマスは答えてイエスに言った。

「私の主。

私の神。」

29 . イエスは彼に言われた。

「あなたはわたしを見たから信じたのですか。

見ずに信じる者は幸いです。」

30 . この書には書かれていないが、まだほかの多くのしるしをも、イエスは弟子たちの前で行なわれた。

31 . しかし、これらのことが書かれたのは、

イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、

また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。

説教

キリストは十字架で死なれて私たちの身代わりに父なる神さまのさばきを受け、私たちの罪を贖ってくださいました。

そして、それから三日目に復活なさり、天にあげられ、

父なる神さまの右に着座されて、弟子たちのために父にとりなし、

弟子たちを守り、助け、教え、導き、弟子たちと共に生きて働いて、

御自身が造られたこの世界でいのちのことばである福音を宣べ伝えておられます。

キリストの復活は、弟子たちにとって衝撃的なまさに革命的な出来事でありました。

キリストの復活を目撃したことで弟子たちは神さまのほんとうの力を知りました。

イエスさまが十字架で死んで終わりなら、

弟子たちはイエスさまの知恵と愛の優れたことを知っていたとしても、

弟子たちを救うイエスさまの本当の力を知ることはありませんでした。

どこにでもいそうな立派なことを言う預言者で終わっていたことでしょう。

あるいは自分の身を犠牲にして人助けをする偉人ということで終わっていたに違いありません。

でも、イエスさまは、単なる預言者でも偉人でもありません。

救い主です。

人を罪から救う救い主です。

人を滅びから救う救い主です。

地獄の滅びから救う救い主です。

そして、使徒パウロがアテネで演説したように、このことの確証を与えたのは、実にキリストの復活なのでした（使徒 17:31）。

イエスさまは、

復活なさった日のその朝にマグダラのマリヤに現れ、

夕方にはユダヤ人の迫害を恐れて逃げ隠れていた弟子たちのところに現れて、彼らを喜ばせます。

19．その日、すなわち週の初めの日の夕方のであった。

弟子たちがいた所では、ユダヤ人を恐れて戸がしめてあったが、イエスが来られ、彼らの中に立って言われた。

「平安があなたがたにあるように。」

20．こう言ってイエスは、その手とわき腹を彼らに示された。

弟子たちは、主を見て喜んだ。

「ユダヤ人を恐れて戸がしめてあった」とあります。

自分たちの大将であったイエスさまがついほんの数時間前に十字架で磔にされて殺された直後でありましたので、

弟子たちは、今度は自分たちがイエスさまのように逮捕されて鞭打たれ十字架に磔にされて殺されるかも知れない、

そう恐れて、一つ所に集まって、息を潜め、戸にかたく鍵をかけて、誰か信徒の家に言わば潜伏していたのであります。

しかし、

その時そこに居合わせなかったトマスは

「私たちは主を見た。」という仲間の証言を聞いてもそれを信じませんでした。

彼はこう言い張ります。

「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、
また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません。」

24．十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたときに、彼らといっしょにいなかった。

25．それで、ほかの弟子たちが彼に

「私たちは主を見た。」と言った。

しかし、トマスは彼らに

「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、
また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません。」と言った。

しかし、それから一週間後の日曜日にイエスさまが現れてトマスにこう言われます。

「あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい。

手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。

信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」

26．八日後に、弟子たちはまた室内におり、トマスも彼らといっしょにいた。

戸が閉じられていたが、

イエスが来て、彼らの中に立って

「平安があなたがたにあるように。」と言われた。

27．それからトマスに言われた。

「あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい。

手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。

信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」

トマスは思わずイエスさまに答えます。

28．トマスは答えてイエスに言った。

「私の主。

私の神。」

するとイエスさまは彼にこう言われたのでした。

29．イエスは彼に言われた。

「あなたはわたしを見たから信じたのですか。

見ずに信じる者は幸いです。」

ここで重要な問いが思い浮かびます。

トマスはどうしてイエスさまが死者の中からよみがえられたことを信じられなかったのでしょうか。

いろいろ理由が考えられると思いますが、

最も単純に考えて、

やはり自分の目の前で無惨に死に絶えたイエスさまが

その肉体ごと復活するなどということ自体、自分の常識に照らして理解しがたいことだったからではないでしょうか。

要するに、彼は神さまがイエスさまを復活させることなどできないと考えていたのです。

彼は、神さまが天と地を造り、それを支配し、成し能わぬことなき全能なるお方であることを幼い時から信じていました。

世の終わりにはその全能の神がすべての死人をよみがえらせることも信じておりました。

そして、イエスさまは御自身が十字架で殺された後に復活なさるということを何度も何度も弟子たちに予告しておられました。

その予行演習として、イエスさまは死んで穴蔵に葬られて四日も経っているラザロをよみがえらせるということまでなさいました。

勿論、トマスが幼い時から記憶していた旧約聖書にはキリスト復活の預言が何度も登場します。

以上を総合すると、イエスさまが十字架で殺されても、父なる神さまがそれを復活させるという結論に当然達します。

そして、現にその復活なさったイエスさまを他の弟子たちが目撃した、との証言もトマスは耳にします。

でも、それでもトマスはイエスさまの復活を信じませんでした。

つまり、彼は、神さまがイエスさまを復活させることなどできるはずがないと自分勝手に思い込んでいたのです。

神の全能の力を見くびっていたのです。

神は無力だと思っていました。

理論では、あるいは知識では、神の全能を信じていました。

でも、現実には信じられなかったのです。

話としてはわかるけど、

でも現実はそんなに甘いもんじゃない、

復活なんてあり得ない、

要するに現実に於いて神は無力だ、

特に誰もがみな飲み込まれてしまう「死」という現実の前には神とて歯が立たない、そう考えていたのです。

しかし、そのようなトマスの不信仰を打ち破るように、イエスさまは復活なさいます。

父なる神さまは死んだイエスさまをよみがえらせたのです。

神は無力ではありませんでした。

神に不可能はありませんでした。

神は死んではおられませんでした。

神のことばは嘘ではありませんでした。

神のことばは真実でした。

神は生きて働いて、その語られたことを実現なさいました。

「彼はハデスに捨てて置かれず、その肉体は朽ち果てない。」

そのみことばの通りに、神はキリストを死人の中から復活させたのです。

神はキリストをよみがえらせた、これ以上に神の全能を証明する事実があるのでしょうか。

無敵の神の力があらためて世に証しされたのでした。

神がキリストをよみがえらせた、
この事実が、後に初代教会の宣教の内容となり原動力となっていきます。

「神はこのイエスをよみがえらせました。
私たちはみな、そのことの証人です。」（使徒 2:32）

「あなたがたは、...この方を引き渡し、このきよい、正しい方を拒んで、いのちの君を殺しました。
しかし、神はこのイエスを死者の中からよみがえらせました。
私たちはそのことの証人です。」（使徒 3:13-15）

「私たちの先祖の神は、あなたがたが十字架にかけて殺したイエスを、よみがえらせたのです。」（使徒 5:30）

「皆さんも、またイスラエルのすべての人々も、よく知ってください。
この人が直って、あなたがたの前に立っているのは、
あなたがたが十字架につけ、神が死者の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの御名によるのです。」（使徒 4:10）

「私たちは、イエスがユダヤ人の地とエルサレムとで行なわれたすべてのことの証人です。
人々はこの方を木にかけて殺しました。
しかし、神はこのイエスを三日目によみがえらせ、現われさせてくださいました。」 使徒 10:39-40

「エルサレムに住む人々とその指導者たちは、このイエスを認めず、
また安息日ごとに読まれる預言者のことばを理解せず、イエスを罪に定めて、その預言を成就させてしまいました。
しかし、神はこの方を死者の中からよみがえらせたのです。」 使徒 13:30

使徒たちは、事あるごとに「神がイエスをよみがえらせた」と宣教しました。

例えば、
三千人の人々を悔い改めさせた時(2:32)、
生まれつき足のきかない男を癒した時(3:15)、
議会で弁明を迫られた時(4:10)、彼らは大胆に「神はイエスをよみがえらせた」と宣教しました。

教会では、
「使徒たちは、主イエスの復活を非常に力強く証しし、大きな恵みがそのすべての者の上にあった」とあります(4:33)。

世俗の権力者に対しては、
「人に従うより、神に従うべきです。
私たちの先祖の神は、あなたがたが十字架にかけて殺したイエスをよみがえらせたのです。」と抵抗しました(5:29-30)。

つまり、「神がキリストを復活させた」、この事実こそ初代教会の使徒たちの宣教の中心でありました。
そして、彼らに神の御意思を行わせ、世俗の権力に抵抗させ、いのちを賭けて伝道せしめた、宣教の決定的な原動力でありました。

神はキリストをよみがえらせた、
キリストをよみがえらせた神、これが私たちの信じ告白する神さまです。

神さまはこの天と地を造られました。

そうです。

この宇宙を支配しておられます。

そうです。

でも、同じように重要な真理は、「神はキリストをよみがえらせた」という事実です。

死んでいたのに、死人の中から、完全に死に絶えていたキリストを復活させた、

この天地万物を造り、生きとし生けるすべての者にいのちを与えて世界を支配しておられる、生けるまことの神は、

無から有を生み出し、石ころをもアブラハムに変え、死人をよみがえらせ、死せる屍と化したキリストを復活させ給うお方なのです。

この「キリストをよみがえらせた」父なる神を信じる故に、

キリスト御自身は、ご自分のいのちを捨てることがおできになりました。

「イエスは、ご自分の前に置かれた喜びの故に、

はずかしめをものともせず十字架を忍び」(12:2)とヘブル書の記者は言いました。

「ご自分の前に置かれた喜び」とは言うまでもなく復活のことです。

早い話、要するに、イエスさまは、ご自分が復活するから十字架で死ぬことができたというのです。

どんなに無惨に惨めに恥ずかしく十字架で死んでも、

どうせ三日後に復活するのだから、だからイエスさまは十字架で死ぬことができたというのです。

それで、何度もご自分が十字架で死なれることを予告する際に、

必ずそれに付け足して「しかし、人の子は三日後によみがえる」と言っておられるのです。

ということは、もしも三日後に復活することがなかったとしたならば、

イエスさまは十字架で死ぬことができなかったということにもなるでしょう。

しかし、父なる神さまは「キリストをよみがえらせることができる」、

そう信じたからからこそ、十字架の苦難を耐え忍ぶことがおできになったのです。

イエスさまは十字架で死なれる瞬間、「父よ、わが霊を御手に委ねます。」と大声で告白して息を引き取られました。

全能の神の御手に御自身のいのちを委ねて、みこころを行って死んだのです。

「キリストをよみがえらせる」父なる神の全能の御手に御自身のいのちを委ねて、死んだ、みこころを行って死んだのです。

ヘブル書によれば、それに続く聖徒たちも、

どんなに苦しい目に遭っても、「さらにすぐれたよみがえりを得るために」釈放されることを願わないで拷問を受けたとあります。

つまり、彼らは、キリスト同様に、「キリストをよみがえらせることができる」神を信じて、喜んで苦難を受けたのです。

もしも彼らが「キリストをよみがえらせることができる」神を信じなければ、

この時の弟子たちのように、人を恐れ、死ぬことを恐れて、「鍵を堅く閉めて」、自分で自分の身を守る他ありません。

神さまの力を信用できないので、自分の知恵、自分の力を信用して、自分で自分の身を守る他ないのです。

いくら神さまの戒めを聞いても、それを行うことができません。

主のために犠牲を払うことなど、とんでもない、以ての外です。

「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。

いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。」 マルコ 8:35

いくらイエスさまがそう言われても、死んで終わりなら、このイエスさまのみことばは何の意味もありません。
誰がその責任を取ってくれるのか、本当に「わたしと福音とのためにいのちを失」ってしまったら、それで一巻の終わりです。

でも、神さまはキリストをよみがえらせました。

神さまはキリストを死者の中からよみがえらせたのです。

だから、たとえ死んでも生きるのです。

失っても、得るのです。

倒れても、起き上がります。

なぜなら、私たちの信じ告白する神は、キリストを死者の中からよみがえらせる神だからです。

たとえ死んでも生きるのです。

生きていて信じる者は死ぬことがない、たとえ死んでも生きるのです。

キリストをよみがえらせた神、

この圧倒的、というより決定的、絶対の存在である神の前には、もう小賢しい人間的な小細工は必要ありません。

人を恐れる必要もありません。

死を恐れる必要もありません。

ただこの神を信じること、そして信じていのちを得ること、それあるのみなのです。

30-31 節を見ると、ヨハネが福音書を書いた目的が載っています。

30 . この書には書かれていないが、まだほかの多くのしるしをも、イエスは弟子たちの前で行なわれた。

31 . しかし、これらのことが書かれたのは、

イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、

また、あなたがたが信じて、イエスの御名によつていのちを得るためである。

ここに集うおひとりおひとりが、

キリストよみがえらせた神を信じて、キリストにある永遠のいのちを得ることができるよう、

そして、すべてのことを神さまに委ねて、恐れることなく、大胆にみこころをなして、神の栄光をあらわされるよう祈ります。